

(美濃・岐阜)

岐阜・彌勒寺西遺跡

みろくじにし

- 1 所在地 岐阜県関市池尻字東屋敷
- 2 調査期間 二〇〇二年(平14)三月～九月
- 3 発掘機関 関市教育委員会
- 4 調査担当者 田中弘志
- 5 遺跡の種類 祭祀遺跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代～平安時代(八世紀後半～九世紀)
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

彌勒寺西遺跡は、長良川畔に位置する国指定史跡彌勒寺跡(ムゲツ氏の氏寺に比定されている寺院跡)・彌勒寺東遺跡(七世紀後半のムゲツ氏の拠点及び律令制下の

武義郡家跡)・池尻大塚古墳(ムゲツ氏が造営主体と考えられる方墳)からなる「彌勒寺遺跡群」の一角で、彌勒寺跡の西側の谷間に展開した祭祀及び工房の跡である。ムゲツ氏は、軍事的・祭祀的な役割を担って

ヤマト王権と深く結びついた伝統的な地方豪族で、壬申の乱では大海人皇子の舍人、身毛君広が活躍した。記紀などの史料には牟婁都・牟下津など様々な表記がみえる。

彌勒寺跡は、同寺所用の軒平瓦が確認された丸山古窯跡(美濃市大矢田)とあわせて、一九五九年に国史跡(彌勒寺跡附丸山古窯跡)に指定された。法起寺式の伽藍配置をとり、川原寺式の複弁蓮華文軒丸瓦・四重弧文軒平瓦・凸面布目平瓦をもつ。金堂、塔、講堂、南門、南門に取り付く掘立柱塀の一部、僧坊や造営に関わる工房跡と思われる掘立柱建物や竪穴住居が確認されている。

彌勒寺東遺跡(一九九四～二〇〇〇年調査)は、東西約五〇m南北約六〇mの掘立柱塀で囲まれた範囲に、正殿と東西の脇殿を「品」字形に配置した郡庁院、東西一三〇mの溝で囲まれた倉庫が建ち並ぶ正倉院、館や厨家の段階的な変遷過程を示すと考えられる建物群、さらに郡庁院や正倉院の下層で、豪族居宅や評家と考えられる大型の掘立柱建物群が見つかっており、寺院造営を契機とする在地支配の変容や、律令制下の地方官衙の営みを考古学的に知ることができ稀な例として注目されている。

さて、今回報告する彌勒寺西遺跡からは、埋没していた古代の谷川から人形や齋串などの木製祭祀具、二〇〇点を超える墨書土器、フイゴの羽口や鉄滓などが出土し、方形に突き出た人工の浜、湧水を誘う井泉遺構、祭祀場を区画した掘立柱列などが検出された。出

土した木簡は五点で、古代の谷川から一三〇〇点余りの木製品とともに出土した。美濃地域ではこれまでに古代の木簡の出土は知られておらず、今回が初めての例となる。

墨書土器は、八世紀後半から九世紀の須恵器で器種や墨書部位は様々であり、墨痕が認められるもの二三〇点余のうち、解読できたものが一〇〇点余りある。墨書には、「大寺」「寺」「厨」「寺(家)」をはじめ「廣万呂」「真枚」「南(榮)」「人名」「大田寫(地名か)」「富」「田富」「福」「富井」「大福」「吉祥」「身月園田」「習書」「池」「鬼女」「得女」「福女」「家方」「答」「定」「器」「常」「中」「継」「朝(臣)」「南」「甲」「了」「供」「麻」「巳人」「富徳」「秋(廷)」「廿」「家」「椽」などがあり、目下接合・解読中である。

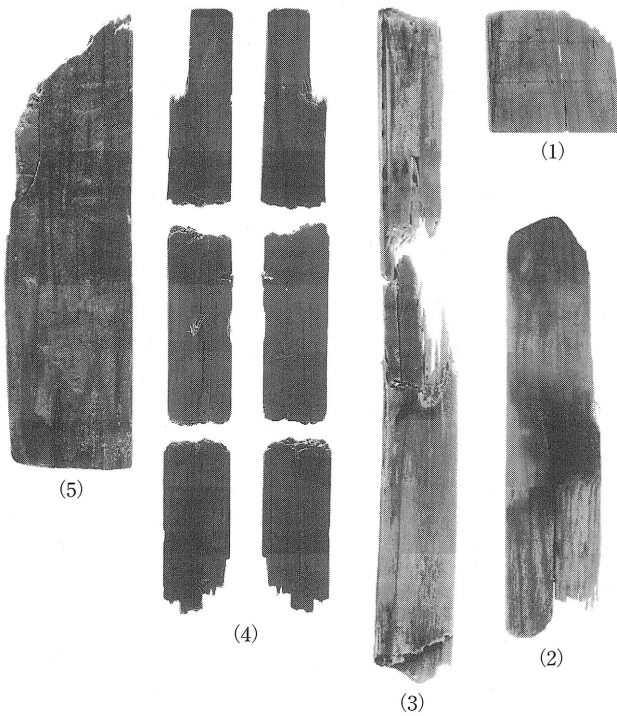
8 木簡の积文・内容

- (1) [石カ] 32×34×1.5 011
- (2) □ (105)×24×2 081
- (3) 人 □ (175)×(18)×4 081
- (4) [九カ] [后急カ] (106+92+106)×35×5 081

- (5) □□人
-

(115)×(31)×4 081

(1)は右上を欠損するが四辺は調整され、裏面の上下端は斜めに面取りされている。鋭利な刃物による二本の刻線(間隔は1cm程)があり、左下に一文字分の墨痕がある。何らかの帳簿類を転用したも



のと思われる。

(2)は燃えさしで、上端部に一文字分の墨痕が確認できる。

(3)は上下端と左半分を欠く。表裏ともに入念な調整が施され、断面形状がレンズ状に仕上げられている。表面中程に「人」と読める墨痕が認められるが、前後の文字は不明である。裏面の墨は流れており、四文字分が浮き上がって見えるが解読できない。

(4)は三片に折損し、下端を欠く。破片どうしは直接接合せず、木目の状態から順番を推定した。表面には明瞭に浮き上がった文字が見えており、一定の期間、屋外で風霜に曝される状態にあった呪符と思われるが、なお検討を要する。これに対して裏面は、よく調整された面に墨が残り、下から二文字目の「人」が確認できる。

(5)は右端と上部を欠く。表面は、(3)(4)と同様に三文字分が浮き上がって見え、一番下の文字が「人」と読める。裏面にも二文字分程の極めて微細な浮き上がりが見られるが解読できない。

(1)～(5)は全てヒノキ材である。なお、積文は肉眼観察によるもので、今後赤外線テレビカメラなどによる観察による変更もあり得る。

9 関係文献

田中弘志「岐阜県弥勒寺遺跡群」『考古学研究』五〇―一、二二〇〇三年)

(田中弘志)